

現代中国の書家二十人を紹介する不定期連載

中国当代書家二十人

第5回

監修／蘇士澍
取材・文／郭同慶

権希軍

権希軍

けんきぐん
一九二六年、山東省生まれ。中国書法家協会副秘書長、顧問、中国刻字研究会会長、中国文聯書画芸術センター顧問などを歴任。著書として『権希軍草書千字文』『権希軍行書滕王閣序』『権希軍書法作品集』『権希軍陶磁器書法作品集』『中国高等美術院校教学（権希軍）範本精選』などを出版。作品は毛沢東記念堂、中国美術館、中国軍事博物館などに収蔵

中国共産党のエリート官僚として人生を過ごし、その後、中国書法家協会の発展に尽力した権希軍氏は、今年、九十二歳。党・協会の業務に多忙な日々を過ごしながらも書法の研鑽に励み続け、ついに書法家として行草書や狂草の新境地に辿り着いた。蘇士澍氏の案内により北京郊外に住む大家を訪ね、郭同慶氏が取材した。

（編集部）

余生於煙臺自幼與大海為鄰
 書心之烟名山輕觀日出普
 於海濤骨中蕩起難以言表
 之激情少小離鄉輾轉南北
 彈指五旬思鄉愈海之情魂牽
 夢縈 戊寅年春月 有幸
 返里 重登煙台山 迎初昇朝
 日 挽無垠雪浪 感慨萬千 滄
 桑巨變 大海依舊 曠人
 生之須臾 慕大海之浩瀚 終
 成此聯 壬午年仲秋書舊作
 福山樵希軍

有幸返里重登煙臺山迎初昇
 日挽無垠雪浪感慨萬千滄桑
 巨變大海依舊曠人人生之
 須臾慕大海之浩瀚終成此聯
 壬午年仲秋書舊作福山樵希軍

雪浪鳴空山嶽動 丹陽吐海宇天開

余生於煙台 自幼與大海為鄰 常登煙台山 朝觀日出 暮聽海濤 骨中蕩起難以言表
 之激情 少小離鄉 輾轉南北 彈指五旬思鄉愈 海之情魂牽夢縈 戊寅年春月 有幸
 返里 重登煙台山 迎初昇朝日 挽無垠雪浪 感慨萬千 滄桑巨變 大海依舊 曠人
 生之須臾 慕大海之浩瀚 終成此聯 壬午年仲秋書舊作 福山樵希軍

265×68×2

党務に携わった書法大家 権希軍

忘れ得ぬ功績

中国共産党（中共）の中央組織部の要職を経て、中国書法家協会（中書協）の草創期に事務方のトップとして企画力や組織力を立派にふるった書壇の長老、中書協顧問の権希軍氏の功績は、今でも忘れることなく中書協発展史に刻印されている。例年同様、今年の春節にも蘇士澍主席ら中書協指導部の役員は揃って権老を見舞った。また還暦後は書法家として芸術の真髄を徹底して追究し、堂々と書法大家の殿堂入りを果たした。その象徴として、故郷の山東省や縁のある大連市に開館している二つの「権希軍芸術館」がある。

権希軍氏は公安行政に携わる地方公務員、そして公安省の中央官僚を経て、三十七歳の時に中共中央組織部に起用された超エリートである。定年間に中共中央宣伝部の傘下にある中書協に異動を果たし、同協会の党務や事務を任された。権希軍氏はそれを契機に書法の研鑽を全うし、書法家への転身を果たしたのである。先日、多忙の蘇士澍主席の案内で北京郊外の権希軍宅に参上した。

苦学少年が独学で書画を身につける

九十二歳の老夫子・権希軍氏は、身長が高く、地方訛りが残る言葉遣いが印象深い。

権希軍氏は一九二六年八月、山東省煙台市福山区のごく一般的な家庭に生まれた。あの乱世の物騒然たる時代に育った権希軍少年の性格は内向きで、人との

会話はあまり好まなかった。唯一、書を書き、絵を描いている時には、活気溢れる姿を見せた。権希軍少年は書法塾で、歐陽詢、顔真卿、柳公権、趙孟頫の楷書をどれも巧みに書いたが、先生はなぜか顔真卿の臨書習作に二重丸を多くくれたという。

福山の小学校では書写を奨励する仕組みがあった。秀作はクラスの壁に貼られ、さらに優秀作は学校の廊下や教職員事務室、そして校長執務室に飾られる。三年生の時、書写で学年の最優秀になると、教頭から題を貰い、それを楷書で書いた聯が校長の事務室に正面である孔子像の両側を飾った。権希軍少年にとってこれ以上の喜びはなかった。家庭に余裕がなかった権希軍氏には、苦学の思い出がたくさんある。手本や筆などの書道用具の購入のため、下校後に新聞販売もした。簡単には売れない新聞を先輩の学友に付き従って煙台の劇場に乗り込み、開演の三十分前によく捌いた。

父親の仕事の都合で一九三八年に大連に移った。そのころは日本の統治下で大連の学校は日本化した教育が進み、権希軍少年はそれには興味を持たず、独学でたくさん絵を描き、書を書いた。特に大連の「年画」（正月に飾る縁起物の絵）を模写し、関帝などの肖像画が好きで繰り返し描いた。見ないで描くことができるほど腕を磨いた。反骨精神もあって、十四、十五歳の時に学校を中退し、いくつかのアルバイトをしているうちに知人の紹介で印刷工場の編集デザイン部門に雇われた。そこで好きな書画や文字編集の修行をすることができた。若さと勤勉さであつと言う間に腕を発揮する



権希軍氏（左）は書を通じて華國峰元国家主席（右）とも親交があった。写真は1980年前半に北京の華氏の自宅にて

ようになった。

一芸が身を助けた順調な官僚人生

一九四五年にソ連軍が参戦し東北三省を制覇し、八月十五日に終戦。日本軍ならびに占領時の統治機関は一齐に撤退したわけである。その後の大連はソ連軍と中国共産党軍が共同管理する「特別解放区」になった。大連新政府には各種の人材が広く集まった。共産党は一貫して宣伝や教育を特別に重視。若きデザイナー・権希軍の才能は評価され、四七年（二十一歳）に大連市役所に採用された。配属は警察署である。警官学校で一年間の研修を終えると、警察署内で宣伝部に所属。署内の宣伝に関するあれこれを統括し、定期的に署内の毛沢東の肖像を描いたり、横断幕のスローガンを書いたりするのは、権希軍青年が担当した実務だ。また、



草書扇面
《蘇軾詞・水調歌頭》

33×65

明月幾時有 把酒問青天
不知天上宮闕 今夕是何年
我欲乘風歸去 又恐瓊樓玉
宇 高處不勝寒……
蘇軾詞 水調歌頭 権希軍

各分署の宣伝担当の研修も企画し、機関紙『大連公安』に「美術文字書き方講座」の講師として名前が広告に掲載されるほどの大活躍。大連駅の周辺にある広告会社の製作ホールを見学し、一日で大きな毛沢東の肖像

画の製作のコツを覚えた。警察署の保管庫にあった日本人が撤退の際に残した油絵の顔料や筆などを活用し、毛沢東の肖像を描いた。本署以外に各分署にも配った。そして宣伝用の漫画（連環漫画）を創作し、警察機関紙や市民の新聞・雑誌に寄稿した。

その頃は実用書写が必要だったが、余暇に習字に研鑽し、日本人が大連で販売した『草書物語』という字典を愛用した。五〇年（二十四歳）、東北公安部（瀋陽）に転勤。瀋陽の古書店で新たに王羲之「草訣百韻歌」、米芾臨「十七帖」の法帖などを入手し、片時も手離さなかった。

一芸が身を助ける。権希軍氏の官僚人生は順風満帆のように出世を続けた。五四年（二十八歳）、北京の公安部に転勤。中央官庁の卓越した仕事環境には感心したという。みな机の上に陶磁器の筆筒や銅の墨箱な



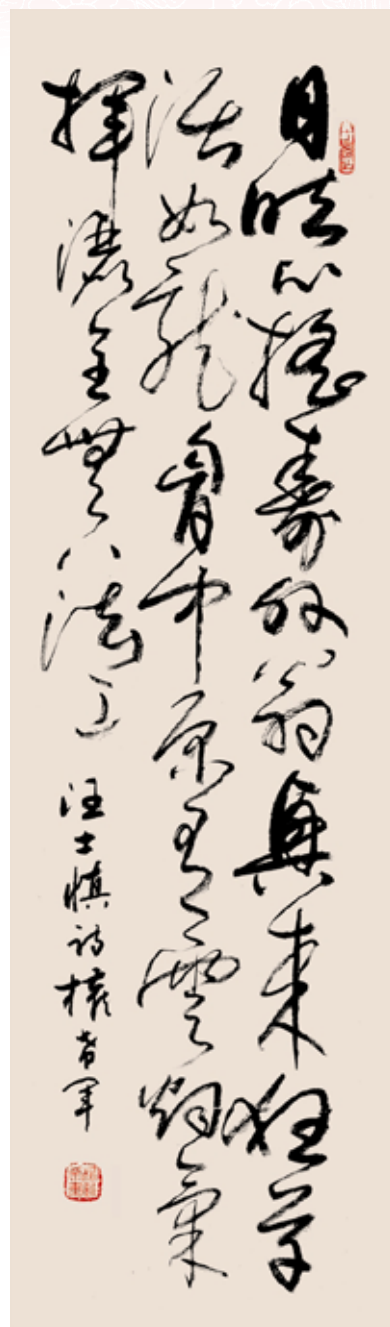
行書軸《福壽》

50×31

福壽
丁酉年冬 時年九十二 権希軍

どの用具が揃っていた。文筆青年・権希軍は最初にまず総務課に行き、それらを手配。宣伝課や秘書課で腕をふるった。六三年（三十七歳）、共産党中央組織部に抜擢され、部内の共産党委員会弁公室に所属し、仕事柄、実用的な楷書や行書に力を注いだ。

公安部は天安門前にあって、「瑠璃廠大街」までに非常に近い。「瑠璃廠」は元・明の時代において紫禁城官用の「瑠璃瓦」を焼成する御製窯元だった。明・嘉靖三十二年、北京外城の建設に伴い、窯元は門頭溝に移転し、「瑠璃廠」の名前は残したまま、街は文化街へ変身した。特に清朝になると、「滿漢分居」により漢民族出身の官僚宿舎や各地方駐京機関・地方会館もこの地に建てられ、そして科挙試験を受ける地方の挙人たちが長期滞在するエリアにもなり、約八〇〇メートルの街に彼らに供給する書籍や文房四宝の店舗がたくさ



137×35

目眩心搖壽外翁 興來狂草活如龍 曾中原有雲煙氣 揮灑全無八法工 汪士慎詩 權希軍

ん設けられ、北京随一の文化街に成長した。辛亥革命によって清朝が崩壊し、人民革命の勝利で新中国が誕生しても「琉璃廠大街」の文化街としての名声は崩れることがなかった。

権希軍氏は「琉璃廠」によく通った。名碑の原拓、製本した拓本、明清そして民国時代の各家の書簡、条幅ならびに巻物の名品と触れ合った。入手した趙孟頫、董其昌の手本を朝夜、臨書した。晋唐儒雅の文人書風に傾倒し、仕事にも使える細字を中心に学んだ末、公安省に限らず中央省庁で随一の書写の達人と評判になった。

党中央組織部より書法家協会へ

一九八〇年二月、胡耀邦氏が中国共産党の第十一回中央委員会全体大会で総書記に就任した。共産党中央の核心である組織部の共産党委員会弁公室室長を務めた権希軍氏は、胡氏の指示で、中国共産党組織史に関する執筆・編集チームを結集し、建党（一九二一年）以来、党内で起きた大事件の史料を基に取り組んだ。史料を閲覧して確認し、長老にヒアリングをし、また座談会を行った。一九八三年、『中国共産党組織大事記』を執筆

し、左傾の過ちを繰り返し犯した原因、過程、被害の程度などを整理し分析した。また、中共中央党校チームと共同で『中国共産党組織史（綱要）』をまとめた。この二冊の組織に関する本は中共中央指導部が高く評価し、中央党校（中央幹部学校）の必修教材に指定された。執筆者の権希軍氏は幹部学校の特命講師も兼ねた。

しかし、権希軍氏は組織部の業務で充実しながらも、書法の研鑽を途切らせることがなかった。一九八一年五月に発会した中国書法家協会の建設にも関心を示した。八五年（五十九歳）のある日、組織部人事担当に呼ばれ、中国書法家協会の専属副秘書長を命じられた。権希軍氏は「副秘書長」がどのような役職か、その地位の高低は問わずに喜んで引き受けた。大好きな書法協会の建設に関わる仕事は希望でもあった。しかし、文化省庁舎にあった中国書法家協会弁公室に行った権希軍氏は、その協会の貧相な様子に驚いた。

ちょうどその年は協会役員の改選の年にあたり、啓功氏が第二回中国書法家協会主席に選出され、王学仲、沈鵬等は副主席、秘書長は陸石、副秘書長が劉芸、みな著名な書家ばかりで非常勤であった。事務所も狭く、実務を担当する協会役員や事務員は少なく、毎日届く



1988年4月、権希軍氏は中国書法家代表団を率いて成田山などを訪問した

各種の書簡は開封されずに山積みの状況になっていた。権希軍氏は「一寸ほどの土壌であっても成長させるのが私の責任だ」と考え、協会の党務、人事の担当として協会の組織の建設や体制の強化に全力を注いだ。また、篆刻や刻字分野の担当をする役員がいなかったので、自ら進んでそれらの業務を兼務した。

中国書法家協会が主催した第一回、第二回の中国全国篆刻展を仕切った。

また、日本刻字協会との交流も推進した。組織部に勤務していた時に中国美術館で開催された日本刻字展を観覧し、良い印象を持っていた権希軍氏は、中国との共同展を打診してきた日本刻字協会に前向きな返事をし、交流展覧会が実現したのである。中国刻字研究会は中国書法家協会の常務理事会で了承し、成立。研究会長を兼務した権希軍氏は、一九九〇年末に日本刻



字協会の招待を受けて、中国刻字研究会代表団を率いて訪日を果たした。日本刻字協会の現状や協会の歩みを視察し、そして渡辺寒鷗氏など刻字作家のアトリエも訪問し、刻字作家同士の交流を実現した。

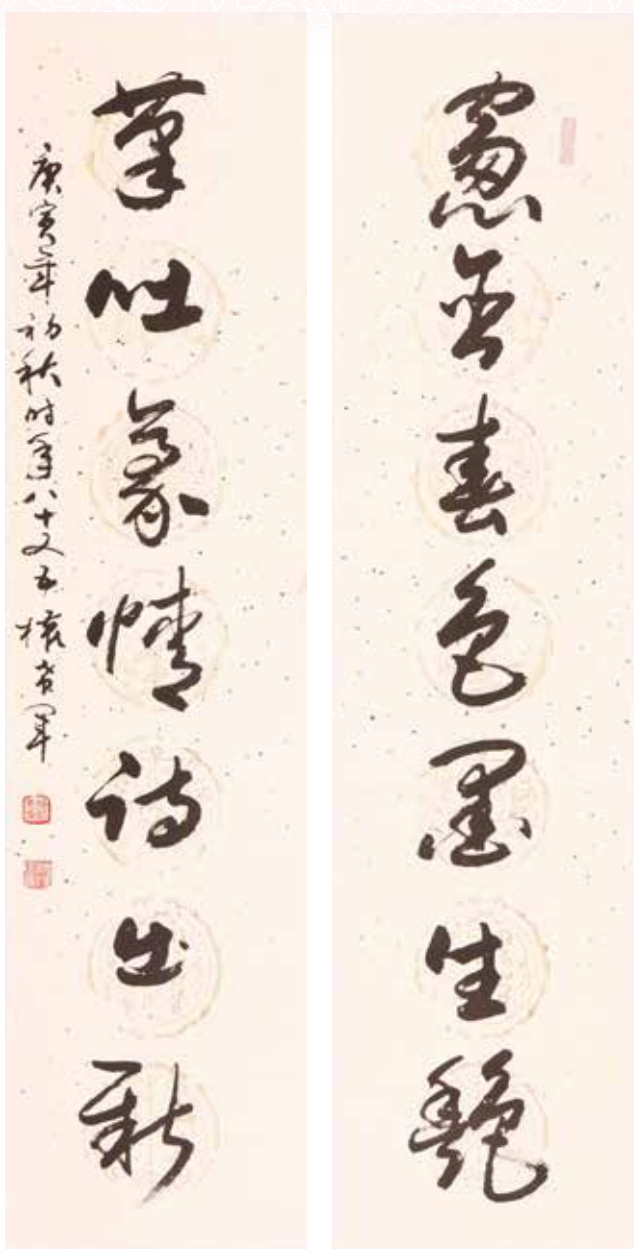
また、国際篆刻展や刻字展を、中国、日本、韓国、シンカポールなどで開催した。

草書の大家——故郷に錦を飾る

一方、書法家としての権希軍氏は鄧小平の「改革開放」政策を大いに歓迎し、協会においてはもっと自由に書法や篆刻の創作ができる風潮を提唱した。

本人も実用的な楷書・行書から、再び草書の創作へ情熱を注いだ。特に孫過庭の「今草」や王鐸・傅山らの「狂草」の研究に力を入れた。特に繰り返し臨書したのは王鐸が王羲之や王献之を臨書した作だ。狙いは

草書七言聯《窗含筆吐》



265×68×2

窗含春色墨生艶 筆吐毫情詩出新
庚寅年初秋 時年八十五 権希軍

自分の書風の変革だった。権希軍氏と同様に晩年に書風や画風の変化を求める大家は少なくない。劉海粟、朱杞瞻などの成功例がある。

権希軍は取り組んだ狂草体は思うように書けなかった。本人は、胆力の大きさに関係するのではないかと弱気を見せた時期もあった。二〇一五年（八十九歳）、見る機会のあったある記録映画に影響を受けた。故郷の山東省が製作した記録映画「蜃気楼」だった。海上に鮮明に映った巨大な蛤（はまぐり）が自由に気を吐き出して、神秘的かつ美しい古城の楼閣の影が作り出された瞬間に感動を受けた。その強い衝撃によって眠っていた悟性が目覚めた。権希軍氏は型破りであることが必要だと認識し、蛤のようにもっと自由に表現すべきだとやっとな悟った。九十歳を過ぎた権希軍氏は、解放された心境で筆を自由に駕御し、行草書や狂草の新天地に迫り着

いた。党の幹部から書法家へと転身した権希軍氏の研鑽の成果は、みなに敬服された。

書を通じた国際文化交流にも尽力した。中国書法家代表団などを率いて日本、韓国、エジプト、ロシア、アメリカ、フランスなど国を歴訪した。

二〇〇一年、中国書法家協会より「中国書法芸術特別貢献賞」を受賞。二〇〇二年には中国書法家画家代表団を率いてロシアを視察訪問した。二〇〇三年、中央テレビ局が「翰墨飘香」という番組で権希軍氏の芸術と生涯を全国放送で紹介した。「故郷に錦を飾る」という言葉の通り、書法大家・権希軍氏に対して二〇〇四年八月、故郷の山東省煙台市福山区の行政が「権希軍芸術館」をオープン。そして、二〇一五年六月には二番目の「権希軍芸術館」が縁のある大連市中山区立美術館の敷地内に盛大に開館し、権希軍が寄贈した書や景德鎮で焼いた磁器の作品が常設され、中共宣伝部前秘書長・官景輝氏をはじめ、組織部の元同僚や中国書法家協会の幹部たちがみな集まり、開館を祝った。

今年九十二歳、高齢の権希軍氏はまだまだ健筆を揮い、創作活動に励んでいる。ぜひ百歳を超えるような長寿を祈る。



郭同慶 かく・どしけい
書家、日本名山田慶太郎。一九五七年、上海生まれ。一九八七年に來日。王羲之、錢君匋、蕭海春に師事。二〇一四年度に上海（朵雲軒）、東京、京都、前橋で個展を開催。上海書画出版社で作品集《墨海一粟》を出版。翰墨書道会長、東京藝術院長、東京海派書画院常務副院長、全日本華人書法家協会副主席兼秘書長、豊道春海頌彰会顧問、日中友好協会参与、群馬県日中友好協会理事、上海中国書法院名誉院士、上海吳昌碩藝術研究協会理事、上海復旦大学王羲之研究会常務理事、日本王羲之先生頌彰会会長などを兼ねる。